

『無差別』

『無差別』 作・中屋敷法仁

【登場人物】

- | | | |
|---|-------|------------|
| A | 族谷狗吉 | (ヤカラヤイヌキチ) |
| B | 族谷狗子 | (ヤカラヤイヌコ) |
| C | 族谷人之子 | (ヤカラヤヒトノコ) |
| D | 日見不姫神 | (ヒミズヒメ) |
| E | 大楠古多万 | (オオグスノコダマ) |
| F | 天神様 | (テンジンサマ) |
| G | 真徳丸 | (シントクマル) |

劇場内には、黒い八角形の舞台。
その上には、長さの異なる七本の鉄柱。
中心にある一本を、残りの六本が取り囲む。

演者「G」が姿を現す。
鉄柱の先を仰ぎ、語り始める。

G
さて…

何から、語り始めるか。

そんなことは問題ではない。問題は、
何を語って、終わり、とするかだ。

私は、いつから、私であったのか。

そんなことは問題ではない。問題は、
私が、いつまで、私であるかだ。

ことの始まりは、即ち終わり。

すべてのことは、終わる為にのみ始められる。

私は、私でなくなった後に、何をしているのか。

そんなことは問題ではない。問題は、

問題は…

私は、私である前に、何をしていたのかだ。

すべての演者たち、登場。

G 生業とはそのまま、その者の名と成る。

F 山で木を伐(こ)る者は、キコリ。

B 海で漁(すなど)る者は、スナドリ。

C G 町で商(あきな)う者は、アキンド。

D F 生業を持たぬ者は、名も持たぬ。

- B E 生業の無い者の名など、誰も呼ばないから、である。
- G ただし、
- C ただし、
- C G 生業を持ちながら、その名を呼ぶことを忌み嫌われる者もある。
- D それは、
- F それは、
- D F 生業そのものが、穢れ多きもの、だからだ。

客席を振り返る「A」。それは「族谷狗吉」である。

- A 【狗吉】我が一族は罪人（つみびと）の末裔。
その咎（とが）により我が一族は、古より
狗を潰して生きてきた。

- B E 赤犬の頭を大鉦の背で潰しやり、
- C G 目玉と腸（はらわた）を引きずり出し、
- D F 毛皮を肉から、肉を骨から引き剥がす。

「狗吉」、鉦を振り下ろす。辺りに飛び散る犬の血。

- A 【狗吉】それを食（くら）い、売り渡し、長きに渡り、生き延びてきた。
- C G この生業を何と呼べよう。
- D F 狗潰し、
- B E 狗殺し、
- C G 狗殺め。
- D F 殺生だ。
- B E 恐ろしい所業だ。
- C G とてもとても言葉に出せぬ。
- D F 出せぬので、

- A 【狗吉】我らの一族は、ムラの人間より
名前の頭に「狗」の一字をあてがわれ、

狗と呼ばれ、狗のように扱われてきた。

俺の名は「族谷狗吉」。「狗」とは、即ち「居ぬ」である。
めでたくも縁起のよい「吉」の字も、

頭に科せられた「狗」のせいで、つまりは、「居ぬ吉」。

喜ばしきことのない、不吉の名前と相成った。

他の演者たち、「村人」となり「狗吉」を罵る。

一同【村人】狗。狗。狗。

A【狗吉】お前らだって、赤犬の肉を食うとるじゃろ。

お前らだって罪人（つみびと）じゃ。

D F【村人】何を言うとるんじゃこのガキは。

B E【村人】わしらが赤犬を食うは、お前らが可哀そうだからじゃ。

C G【村人】お前らを憐れみ、厭々ながら、赤犬の肉を買ってやるのじゃ。

「村人」たち、「狗吉」から離れ、

D F【村人】赤犬の肉は、やわらかく香りよく、飛び上がるほどに旨い…。

C G【村人】食いたいで、

D F【村人】食いたいで。

B E【村人】祟りは厭じゃ。

D F【村人】仏罰は恐ろしい。

C G【村人】やつらにやらせろ。

B E【村人】族谷にやらせろ。

D F【村人】どうせやつらは、生まれながらに罪人（つみびと）じゃ。

「村人」たち、「狗吉」を見る。

鉦を振り上げている「狗吉」。

C G【村人】不殺生の戒を破り、地獄に墮ちるは族谷じゃ。

「狗吉」、再び、鉈を振り下ろす。辺りに飛び散る犬の血。
高らかに笑う「村人」たち。

A 【狗吉】 罪咎（つみとが）を犯し、ムラ人を肥（こえ）さす。
それこそが俺の生業。つまりは、生きる業…。

集まってくる「狗吉の父母」と「一族の者」たち。

C G 【父母】 嘆くでないぞ、狗吉。

A 【狗吉】 父上。母上。

B D E F 【一族】 神も仏も、人間も、我が一族を見放したのじゃ。

C G 【父母】 よいではないか。よいではないか。とらわれを捨て、

B D E F 【父母一族】 「狗」として生きていこうではないか。

A 【狗吉】 俺は、「狗」じゃねえ…「人間」じゃ…。

「狗吉」、虚空に手をかざす。

「狗吉」、手を合わせ、祈ろうとするが、

A 【狗吉】 …駄目じゃ。赤犬を殺してきた俺の手は、穢（けが）れとる。

手を合わせることも、数珠を握ることも許されぬ。

赤犬を食うてきた、俺の口は、穢（けが）れとる。

念仏も祝詞もつぶやけぬ。

父上。母上。どうして俺に、赤犬を殺させた。

C G 【父母】 そうしなきゃ、生きていけないからだよ。

A 【狗吉】 どうして俺に赤犬の肉を食わせたんじゃ。

一同 【父母一族】 そうしなきゃ生きていけないからだよ。

A 【狗吉】 物心がついた時にや、俺はもう…

神にすがれぬ穢れた体じゃ…。

一同 【父母一族】 それこそが、お前の生業…生きる業だよ。

A 【狗吉】 お恨み申し上げるぞ…父上、母上。

我が一族、全てのご先祖、お恨み申し上げるぞ。

突如、歓声がわき起こる。

E 【一族】 めでたや、めでたや。女兒（おんなご）じゃ。

D 【一族】 女兒が生まれた。

A 【狗吉】 …おんなご？

C G 【父母】 狗吉、お前に妹が生まれたよ。

A 【狗吉】 …いもうと？

C G 【父母】 狗子じゃ。

A 【狗吉】 …いぬこ？

煙のように霞んでいく「一族の者」たち。

演者「B」演じる、生まれたばかりの「狗子」の姿。

A 【狗吉】 いもうと…いぬこ…。

その目はいまだあどけなく、穢れを知らぬ。

柔らかい肌…澄んだ眼（まなこ）…。

生まれたばかりの命とは…こんなにも美しいものなのか…。

C G 【父母】 子を生ませろ。

D E F 【一族】 太らせろ。

一同 【父母・一族】 赤犬を食わせて、太らせろ。

A 【狗吉】 やめろおお…。

「狗吉」、「狗子」を取り上げ、抱きしめると、

A 【狗吉】 こいつは、俺の妹じゃ。俺が育てる。

父上、母上、乳が離れたら、狗子は俺にくれ。

俺が立派な、狗殺しに育て上げる。

ゆっくりと立ちあがる「狗子」。
幼女へと成長したようだ。

「狗吉」は「狗子」に、赤犬を見せながら、語りかける。

A 【狗吉】 狗子。お前は人間様じゃ。

赤犬を殺してはいかんぞ。赤犬を食ってはいかんぞ。

これは罪深いことなのじゃ。

どんなにひもじくとも、

人間様としての振る舞いを忘れてはいかんぞ。

ほら、米を買って来てやったぞ。きれいじゃろう。

父上、母上には見つかるな。お前だけが食うのじゃ。

「狗子」、米を握らせようとする兄を手を振り払い、
赤犬を指さす。

A 【狗吉】 ……この兄の仕事を…手伝うというのか。

ならば狗子、お前は鉈を捨て、ノミを手に取り、

「仏」を彫るんじゃ。

ノミと木槌を持たされた「狗子」。

A 【狗吉】 「仏」を彫り、祈るんじゃ。

「狗子」、ノミを木にあて、木槌を勢いよく振り下ろす。

A 【狗吉】 この兄は、どうあがいても地獄行き。

無間地獄で現生の裁きを受けるのがさだめ。

だがな狗子、お前だけは、

お前だけは罪を犯さず、穢れを知らず極楽浄土へ行ってくれ。

それこそが、俺の、生きる業、生業（なりわい）なのじゃ。

仏を彫りながら、「狗子」は少女へと成長する。

B【狗子】私は…言葉を覚えるより先に、ノミで仏を彫ることを覚えた。

兄は赤犬を殺し続け、その金で私に何でも買い与えた。
私が穢れることのないよう、自らすすんで穢れたのだ。

木槌を振り下ろす「狗子」の後方で、

鉦を振り下ろす「狗吉」。

辺りに飛び散る犬の血。それを眺める村人たちに、

A【狗吉】ほら…丸々と太った赤犬の肉じゃぞ。銭を寄越せ。

赤犬の肉を食いたば銭寄越せ。銭じゃ。

「狗子」必死に仏を彫り、兄の声をかき消す。

B【狗子】戦争が激しくなり、父が死に母が死に、

一族の者たちがことごとく死んでいく中にあっても、兄は、
私の為だけに、生き続けてくれました。

「狗吉」と「狗子」、視線が絡む。

兄から顔を背けた「狗子」の肩を「村人」たちが掴む。

C E【村人】国民学校に入学できるのは大日本帝国の子だけじゃ。

D G【村人】狗の子を入れるわけにはいかん。

「狗吉」、立ち去る。「村人」たちには目もくれず、

A【狗吉】大丈夫じゃ狗子。お前は、あいつらとは違う。

お前は、勉強なんぞ、せんでもええ。

ほら、有り難いお経をもううてきてやったぞ。

お前は、これを書き写すんじゃない。

「狗子」兄から顔を背け、

B 【狗子】 私は：経の意味などひとつも、わかりません。

ただただ書き写し、それで功德が得られましょうか。

：しかし赤犬を殺し、自らの業を生き続ける兄の背中に、
何も言えず、

ただただ、経を書き写し、仏を彫るのです。

遠くから、歓声。

C D E F G 【村人】 大日本帝国、万歳ーっ。

A 【狗吉】 何じゃ、あれは。

B 【狗子】 また誰か、戦に行くのでしょうか。

「狗吉」、棲家から飛び出し、国旗を振る。

B 【狗子】 兄さん…。

A 【狗吉】 大日本帝国、万歳ーっ。天皇陛下、万歳ーっ。

「村人」たち、「狗吉」に罵声を浴びせながら、

殴りかかる。羽交い絞めにされる「狗吉」。

C E 【村人】 おい、狗。何で貴様のような狗が、日の丸を振っとるんじゃない。

D F 【村人】 誰じゃ、こいつに日の丸を持たしたんは？

A 【狗吉】 俺が、自分で作ったんじゃない。

指先を噛み切り白布（しろぬの）に、

俺の血でまあるく描いたんじゃない。

お天道様を日の丸を、描いて神軍の勝ち戦、

祈って掲げて、振ったんじゃ。

殴られる「狗吉」。

C E 【村人】 狗の血で描いた日の丸を掲げるとは…皇国を貶める行為ぞ。

D F 【村人】 狗。お前は、国民でもなければ、非国民でもない。

一同 【村人】 人に非ずじゃ、狗じゃ狗。

「村人」は「狗吉」に蹴りを浴びせ、立ち去る。

うずくまっている「狗吉」。

B 【狗子】 兄は、私を育てながらも尚、

「人間でありたい」というとらわれを

捨て去ることが、できなかったのです。

A 【狗吉】 どうしたらいいんじゃ。

どうしたら俺は人間様になれるんじゃ。

B 【狗子】 兄さん…兄さんは人間ですよ。

A 【狗吉】 駄目じゃ、俺は畜生以下じゃ。

B 【狗子】 兄さん…。

A 【狗吉】 触るな。触れば狗子、お前の手が穢れてしまう。

触っちゃいかん。

B 【狗子】 そんな…あなたは私の兄ではないですか。

A 【狗吉】 お前のことは、ええんじゃ。

お前はもう、極楽浄土が約束された身じゃ。

しかし俺は、現世にいる束の間の、ほんの僅かでも、

人間様として、生きてみたい…。

B 【狗子】 兄を人間扱いしていないのは、他でもない。

兄自身だったのです。

「軍人」たち、やってくる。頭を下げている「狗吉」。

D G 【軍人】 …… 狗の分際で、戦いたいだと？

御国の為に戦って、死にたいだと？

戦って死んで靖国に、英霊として祀られたいだと？

C F 【軍人】 黙れ狗。狗の力を借りねばならぬほど、

皇国は落ちぶれておらんぞ。

A 【狗吉】 お願いでございます。行かせてください。

マニラでもハルピンでも満州でも、どこでもいい。

日本国の兵士として、死なせて下さい。

人間として、死なせて下さい。

D G 【軍人】 …… 狗吉。お前に知恵を与えよう。

A 【狗吉】 知恵？

C F 【軍人】 あのヤマの頂きに鎮座する、

千年は生きたであろう楠の木の、

天高くそびゆる大枝を、伐り取って参れ。

演者「E」、鉄塔に体を絡ませながら登り、

楠木と変貌していく。

A 【狗吉】 楠の木の、大枝を伐りとる…。

D G 【軍人】 その枝を戦勝祈願の為の香木、護摩木（ごまき）として、

皇国へ献上するのじゃ。

A 【狗吉】 楠の木の、大枝を伐りとる…。

C F 【軍人】 それが叶えば狗のお前、戦に連れて行ってやらんでもない。

「狗子」が駆け入ると、「軍人」たちは消える。

B 【狗子】 おやめ下さい。…あの楠木は、ヤマの神。

千年以上もこのヤマを見守ってきた御神木です。

その枝を伐り取るなど…どんな災いが降りかかるか…。

A 【狗吉】 どうせ俺は、罪人じゃ。

数え切れんくらいの狗を殺してきたんじゃ。
崇りなど恐ろしくないわ。

B 【狗子】 兄さん…。

A 【狗吉】 俺は、神を殺して人間様になるんじゃ。

B 【狗子】 穢れ多き兄の手で、穢れぬままに生きてきた私、

兄の心の真（まこと）の穢れ…
拭い去ることはできませんでした。

ヤマの獣たちの鳴き声が轟く。

大楠木の精霊、大楠古多万が語り出す。

E 【大楠】 土竜（モグラ）たちよ。我に仕える盲（めくら）の一族よ。

私の呼びかけに応じ、土の中よりその醜い姿、現せ。

地中より現れる「モグラ」たち。

一同 【モグラ】 お召しじゃ。お召しじゃ。

A B 【モグラ】 盲（めしい）な我らをお召しいじゃ。

C G 【モグラ】 御主（おんあるじ）、大楠古多万。

A B 【モグラ】 如何なる故あって、我らモグラをお召しになるのか。

E 【大楠】 聞いたぞ。聞いたぞ。ついにわしは神の声を聞いたぞ。

歓喜の「モグラ」たち。

E 【大楠】 この大楠古多万。楠木としての命を授かり早千年。

ヤマに生きる鳥や獣たちを治むる主として、

天土（あまつち）に感謝し、生きてまいった。

そんなわしのもとに、天神様が御降臨されたのじゃ。

「天神様」、雷鳴とともに姿を現す。

F 【天神様】 大楠古多万よ。これよりは

大楠古多万神（おおぐすのこだまのかみ）と名乗るがよい。

高天原におわす神々と共に、このクニを守るのじゃ。

再び雷鳴。「天神様」は大楠木の枝に腰かける。

E 【大楠】 ついにわしは、「カミサマ」になったのじゃ…。

C G 【モグラ】 よし、これほどめでたき日には相応しかろう。

A B 【モグラ】 ヤマの神様に、我らが頂いた命、お返ししようではないか。

E 【大楠】 命を返す？

A B 【モグラ】 連れてまいれ。

連れて来られたのは幼いモグラの「ヒメ」。

A B 【モグラ】 これは昨日生まれました、我らの娘でございます。

C G 【モグラ】 美しい。美しい娘でございますが、

これをご覧（ごろう）じろ。

E 【大楠】 これは…。

A B 【モグラ】 天は二物をお与えになりませぬ。

E 【大楠】 …手が無い。指が無い。爪が無い。

C G 【モグラ】 「かたわ」の娘でございます。

E 【大楠】 かたわ？

C G 【モグラ】 手が無くては、土は掘れませぬ。

モグラとして生きる価値などありません。

A B 【モグラ】 かたわで生き永らえておっても、栓なきこと。

C G 【モグラ】 ここはひとつ、

A B 【モグラ】 大楠古多万神への捧げ物として娘の命、

お返ししたく思います。

C G 【モグラ】 穢れぬ体でそのままに、命をお返しできるなど…

娘もさぞ幸せでございましたよ。

E 【大楠】 うむ。わかった。娘の命、頂くとしよう。

歓喜の「モグラ」たち。

D 【ヒメ】 …大楠古多万神。

E 【大楠】 お、口が聞けるのか。

AB 【モグラ】 我らが美しき娘は「めくら」「かたわ」では御座いますが、
「どもり」「つんぼ」の類にあらず。

CG 【モグラ】 さあさ娘よ。命を頂いてくださるそうだと。

大神様に御礼申し上げるのだ。

D 【ヒメ】 大楠古多万神。私は…死にとうございませぬ。

一同 【モグラ】 なにっ？

D 【ヒメ】 何故、お返ししなければならぬのでしょうか？

盲のモグラ、手無しのかたわに生まれましたが、
命の価値は皆と同じのはず。

私にも全うさせていただきます。

私に、私の命、生きさせていただきます。

「大楠」の言葉に「天神様」の声が重なる。

EF 【大楠】 命の価値…。そもそも命に価値など無い。

命とは、等しく誰もが手にし、等しく誰もが失うものじゃ。
価値あるは、その限りある命を生きる中で、

何をなしたかじゃ。

美しきモグラの姫君よ。盲の手無しに何ができる。

一同 【モグラ】 娘や。大神様に命を頂いてもらえ。

それが、父、母、みんなの願いじゃ。

D 【ヒメ】 死にたくない…死にたくない…。

「モグラ」たち、「ヒメ」を殴る。気を失う「ヒメ」。

E 【大楠】 今日はまだ休まねばならぬ。

わっしの、根っこの、隅っこに、深く穴掘り閉じ込めよ。
明日の朝には、この大楠古多万神が、娘の命もらい受ける。
明日の朝には、食ってやる。

一同 【モグラ】 ありがたや。ありがたや。

D 【ヒメ】 死にたくないっ。死にたくないっ。死にたくないっ。

「モグラ」たち、「ヒメ」を生き埋めにしてしまう。
土の中で必死にもがく「ヒメ」だが、

D 【ヒメ】 …もがけども、もがけども固い土を握ることはできぬ。

モグラとして生まれながら、両の手先が無いなどと…。

私の命は何の為に、何をなす為にあるのか。

わからぬ。わからぬぞ我が命。

…しかし何よりわからぬことは、

このような身に生まれてもなお、

「生きたい」と願う私の心じゃ。

何故この期に及んでも、「生きたい」と願うのか。

わからぬ。わからぬぞ我が心。

…祈らねばなるまい。命あるようにと祈らねばなるまい。

しかし、果たして、何に祈れる？

神か？ いや、私の命は神への供物。生贄。捧げ物。

神に祈れようはずがない。…では、どうする。

私は…私の命そのものに祈ろう。

私の命そのものに、かしくみ、かしくみ、祈りを捧げよう。

我が命よ、我が命として、尊くあれ…。

「ヒメ」、激しく、祈る。

一方で「狗吉」、鉦を研ぎながら、語り出す。

A【狗吉】今宵が最後の俺の業。狗を潰すのもこれまでじゃ。

明日の朝には楠木の、天高くそびゆる大枝を、
伐りとり神国日本の、兵士となるのじゃ。

人間となるのじゃ。

今宵が最後の俺の業。これが最後の、狗殺し。

B【狗子】大鉦を研ぎ終えた兄の顔は笑っていた。

穢れ多き生業を前にして、

兄が笑ったのは、初めてだった。

D【ヒメ】死にたくない。死にたくない。

「狗吉」、演者「C」の演じる「母犬」を連れてくる。

舞台後方では、演者「G」が、舞を奏している。

B【狗子】その赤犬は、母親だった。

A【狗吉】腹が大きい。大きいのが、腹の中には何匹も何匹も、

この世に生み落とされるのを待っておる子犬がいるはずじゃ。
殺生はおそろしい。が、これほどおそろしい殺生はあるまい。

いまだ生まれえぬ命もろとも殺すとは…。

「狗吉」、「母犬」を鉦で屠（ほふ）る。

B【狗子】毛皮を肉から、肉を骨から引き剥がす。腹を裂いてみれば、

A【狗吉】やはり子犬じゃ。死んでおる。

「狗吉」、「母犬」の腹から子犬を引きずり出す。

B【狗吉】ひいの、ふうの、みいの、ようの…五匹か。

「これは売り物にはならん。食えん。捨ててしまえ。」

「狗吉」、子犬を捨て、「母犬」の体を解体する。

B 【狗子】 赤犬の体を取り分けながらもなお、兄は笑っていた。

A 【狗吉】 何をしている狗子。お前は念仏を唱えるんじゃ。

狗の血を浴び、穢れしこの手、

夜明けにや楠木、神殺し。

祈り続ける「ヒメ」。

D 【ヒメ】 死にたくない。死にたくない。死にたくない。

オスの「モグラ」たち、穴を掘り現れる。

D 【ヒメ】 お父様、お兄様方：助けに来てくださったのですか。

G 【モグラ】 ……なんじゃこの匂いは。

C 【モグラ】 なんじゃこのええ匂いは。

B 【モグラ】 命の匂いじゃ。

A 【モグラ】 若い娘の命がわきたつ匂いじゃ。

一同 【モグラ】 たまらんのう。たまらんのう。

祈る「ヒメ」の臭いに引き寄せられた「モグラ」たち。

「ヒメ」の体をまさぐり始める。

D 【ヒメ】 おやめください。おやめください。

一同 【モグラ】 よいではないか。よいではないか。

D 【ヒメ】 舌を噛み切りませぬぞ。

C G 【モグラ】 ……舌を噛み切り今死なれては、大神様がお怒りじゃ。

A B 【モグラ】 引き下がろう。

C G 【モグラ】 土をかぶせろ。

「モグラ」たち、何処かへ行こうとするが、

D 【ヒメ】 …お待ちください。

私の真の本心は…

死ぬ前に一度、男に抱かれてみとうございます。

自らの本心を偽り、「ヒメ」は語り続ける。

D 【ヒメ】 ただし、その代わりに、こちらの「穴」、

少し広げてはくさいませぬか。

命をお返しするまでの仮屋とはいえ、ここはあまりにも狭く

苦しゅうございます。

私と一回、交わることに

土壁を一回、御掘りください。

私の「穴」を 広げるついで、

こちらの「穴」を 広げてください。

一同 【モグラ】 お安い御用じゃ。

土壁を掘りながら、

幼い「ヒメ」の体を弄ぶ「モグラ」たち。

G 【モグラ】 ううむ、一度交わればもう止まらぬ。止められぬ。

一同 【モグラ】 交われ。交われ。掘れや、掘れ。

「モグラ」たち、激しく「ヒメ」を犯す。

土壁は広がり続け、やがて巨大な穴となる。

大楠木の根は大地から離れ、倒れてしまう。

呆然とする「モグラ」たち。

A B 【モグラ】 塵も積もればなんとやら…。

こんなにも大きい穴を掘ってしまった。

C G 【モグラ】 大楠古多万神様を、倒してしまった。

A B 【モグラ】 げにおそろしや、オスモグラの情欲。

C G 【モグラ】 かたわの娘との交わりに溺れ、神を殺してしまった。

E 【大楠】 朝じゃ朝じゃ。お天道様の御恵みを授かる朝じゃ。

さてさて、昨日のかたわの娘、骨も残さず、食ってやろう。

…あれ？なんじゃこれは？

倒れておるぞっ。わし、倒れておるぞーっ。

A B 【モグラ】 神なきヤマは恐ろしい。

一同 【モグラ】 逃げるぞう。逃げるぞう。

雷鳴とともに空中に現れる「天神様」。

F 【天神様】 ヤマの主たる大楠古多万神。

それがどうつと倒されるとは。

やい、モグラども。何があった。

一同 【モグラ】 知りませぬ。我ら旨には何もわかりませぬ

F 【天神様】 知らぬわけがあるか。この大穴、

モグラの手により掘られたものじゃ。

一同 【モグラ】 きーっ。

F 【天神様】 ヤマから命を貰い受け、ヤマに育てられし汝らモグラ。

ヤマの神を殺めたるとは、なんたる罰当たり。

モグラとしてその命、天にお返しせよ。

「天神様」が手を振りかざすと、

「モグラ」の元に雷が降り注ぐ。

次々に倒れていく「モグラ」たち。

「ヒメ」だけが残った。

F 【天神様】 おお、まだ一匹、残っておったか。

D 【ヒメ】 か、雷様…。

F 【天神様】 雷様じゃない、天神様じゃ。

D 【ヒメ】 私をお助け下さい。

F 【天神様】 駄目じゃ。

神を殺めしモグラの一族、娘と言えど、生かしておくものか。

D 【ヒメ】 これをご覧じろ。

F 【天神様】 …手が無い。指が無い。爪が無い。

D 【ヒメ】 大楠古多万神を倒したるは、たしかにモグラの掘りし穴。

しかし、かたわの私には穴を掘るなどできませぬ。

私は、やっておりませぬ。

F 【天神様】 たしかに、罪咎無き者に、罰は与えられぬ。

よし、見逃してやろう。

D 【ヒメ】 お待ちください。雷様。

F 【天神様】 雷様じゃない、天神様じゃ。

D 【ヒメ】 盲のモグラ、手無しのかたわに生まれましたる私、

一族をみな殺されて、

これからどうやって生きてゆけましょう。

お憐れみを。お憐れみを…。

「ヒメ」、祈る。

その姿は、舞っているかのように美しい。

F 【天神様】 祈りおったか。

かたわの腕を振り乱し、自らの命、祈りおったな。

「生きたい」と願う、そなたの純粋な命、畏れいった。

盲のモグラのかたわの娘。

日不見姫神（ひみずひめ）と名乗るがよい。

大楠古多万神になり代わり、

このヤマを治める神となるのじゃ。

「ヒメ」、天上高く舞い上がり、天神様と並ぶ。

横たわっている楠木は、それを眺め、

E 【大楠】 天神様…天神様…。

ど、どうしてわしの声をお聞きくださらぬのじゃ。
はっ。そうかつ。

わしを神たらしめるは、千年も生きた楠木としての命。
それが途絶えようとしている今…

わしの神としての力も…ホンワカパッパ。

そこへやって来たのは「狗吉」。

A 【狗吉】 なんじゃこれは。楠木が倒れとる…。

モグラが仰山死んでおる…。

E 【大楠】 お前は…狗の一族の末裔じゃな。我を助けよ。

ムラの人間を呼び集め、我を助けよ。

A 【狗吉】 御神木と言えど倒れてしまえば、ただの木じゃ。

触らぬ神に、祟りなし、

祟らぬ神に、障りなし、じゃ。

「狗吉」、楠木の枝を切り落としてしまう。

E 【大楠】 枝があー。わしの一番長い大枝があー。

「狗吉」に、「日不見姫神」が語りかける。

D 【日不見】 人間の男よ。犬の一族の末裔よ。大楠古多万神になり代わり

この「日不見姫神」が新たにヤマの主と相成った。

ムラの人間にこのことを伝えよ。広めよ。

我を崇めよ。我の命を奉れ。

しかし、立ち去る「狗吉」。

E 【日不見】 ちょ、ちよっとー。奉れっ。奉れっ。

…何故じゃ。なぜじゃー。

F 【天神様】 穢れた者に、神の声は聞こえぬ。

D 【日不見】 モグラとしての命を捨て、神の命を授かりし私じやが、

ああわからぬぞ、我が命。何をなす為に、いまだあるのか。

E 【大楠】 これをご覧か神々よ。あの人間に、天罰を…。

F 【天神様】 このような大楠、

いつまでも横たわっておっては邪魔でならぬ。

E 【大楠】 えっ…。

F 【天神様】 早よう朽ち果てた方がよからう。

「天神様」、楠木に雷を落とし、消える。

E 【大楠】 獣たちに裏切られ…人間には枝切られ…

神にまで体をいたぶられる…。

もはや何も信じぬぞ。神も獣も人間も、もはや何も信じぬぞ。

恨めしいのう。恨めしいのう。

演者「E」、一旦、役を演じることを辞め、

E 説明しよう。雷が落ちた木には、茸がたくさん生えるようになるのだ。

天神様の雷を受けた楠木からは、世にも奇ッ怪な、茸が生まれた。

演者「E」、妖怪「ウラミダケ」となる。

E 【ウラミ】 …なんじゃこの体は。茸ではないか。クサビラではないか。

はっ。そうかっ。この世の全てを恨む心が、

我を茸の「もののけ」として転生させたわけだな。

わけだなっ。

恨めしい…恨めしいのう。

恨みに恨んで、ウラミダケ。それこそわが名前。

「ウラミダケ」、あてもなく歩き出す。

「狗子」と「子犬」が現れる。

B 【狗子】 兄が殺した赤犬の、腹から引きずり出された五匹の子犬。

そのうちの二匹に、まだ息がある。
生きている。

兄が犯した最後の業。赤犬殺しから免れた命…。

私は、穢れるわけにはまいりません。

兄の業を負うわけにはまいりません。

私は、子犬を助けた。その小さい体を洗った。

C 【子犬】 ああ…。

B 【狗子】 熱い。熱い。これが命か。

どうやら雌犬…。生まれたばかりの命というに、すでに、
新たな命を生む業を負うておる。

C 【子犬】 ああ…。

B 【狗子】 お前の母の命を奪った業。それは私の兄が負う。

お前の命を助けた業、それは私が負おう。

狗殺しの家に生まれ、狗を育てる羽目になるとは…。

これも、御仏の御導き…。

「狗吉」、楠木の枝を持ち、帰って来た。

A 【狗吉】 狗子。見ろ。大楠木の枝じゃ。これで俺は人間様じゃ。

「子犬」を見つけると、

A 【狗吉】 …我ら人間様が助けた命なら、こやつは狗の子にあらず。

人之子じゃ。人之子じゃ。

どこからともなく、声が聞こえてくる。

DEFG 大日本帝国、万歳ーっ。

A【狗吉】 背負うた。背負うた。日の丸を背負うたぞ。

これで俺も人間様じゃ。

DEFG 大日本帝国、万歳ーっ。

A【狗吉】 狗子。この兄がいなくなっても、穢れるでないぞ。
穢れるでないぞ。

DEFG 大日本帝国、万歳ーっ。 天皇陛下、万歳ーっ。

激しい空襲の音とともに、「狗吉」の姿は消える。

B【狗子】 戦に行く兄を見送った夜、私の股からは、初めて

血が流れ出した。

「人之子」となった子犬が、語りだす。

C【人之子】 私は母さんが好きだった。母さんこそ、私のすべてだった。

母さんの幸いのためなら、私はどんなことでもする。

仏を彫っている「狗子」。それを見つめる「人之子」。

B【狗子】 この母の仕事を手伝うというの、人之子。

あなたは、何もしなくていいのよ。

C【人之子】 母さんがノミで仏を彫る姿を見て、私もそれを覚えた。

これなら、私にもできる。

母さん。ノミを貸してください。

「人之子」、「狗子」からノミを奪おうとする。

B 【狗子】 人之子、あなたも仏を彫ろうというの。

…あなたには無理よ。

犬畜生に、御仏の心はわかりません。

C 【人之子】 犬畜生…？

B 【狗子】 あなたは狗よ。メス狗なの。

C 【人之子】 メス狗…？

「人之子」、鏡に映る自分の姿を見て、驚愕する。

C 【人之子】 鋭いきば…固いヒゲ…全身を覆う赤い毛…シツポ…。

私は、犬だったのか…。

犬の遠吠えが聞こえる。

C 【人之子】 私は母さんの子になりたかった。

人の言葉を学んだ。いろはにほへの、ひいふうみい。

母さんの語る言葉、書き写す文字、その全てを理解できる。

…しかし、学べども学べども、私の口、犬の口から

人間の言葉を発することはできなかった。

地鳴り。「狗子」と「人之子」の上に、

「日不見姫神」が姿を現す。

D 【日不見】 人間の女と、雌の犬。

B 【狗子】 この声は…？

D 【日不見】 私の声が聞こえるのか。

B 【狗子】 聞こえます。聞こえます。

D 【日不見】 よっしゃー。我が名は「日不見姫神」。

盲のモグラのかたわの姫じゃ。

私が私のこの命、尊くあれと祈った顛末。

オスモグラどもの情欲を、駆り立ててこの大穴を、

掘らせて倒した大楠木。

神を殺したこの私、新たにヤマの神と相成った。

お前の兄は息災か。

B 【狗子】 …はい。戦に行きました。

D 【日不見】 感謝せよ。

楠木の太枝を伐り取り、無事なるは、

この私が、楠木を殺したからじゃ、あらかじめ。

さあ、女。我を祀れ。我を崇めよ。私の命を奉れ。

B 【狗子】 お断りします。

D 【日不見】 は？

B 【狗子】 山の神を殺したというあなたの命なぞ、祈れませぬ。

D 【日不見】 いやいや、だってあの人ね、私を食おうとしたのじゃぞ。

命を奪おうとするものの、命を奪って何が悪い。

B 【狗子】 あなたは神の生贄だったのですか…。

D 【日不見】 そうよ。

B 【狗子】 ならば、あなたの命は神に捧げるべきもの、

神を殺し神になるなど言語道断。

D 【日不見】 きーっ。

「日不見姫神」が怒ると、地鳴りが起きる。

D 【日不見】 …まあ、今に見ておれ。やがてイヤでもこの姫を

神と崇めねばならんようになるぞ。

聞け。

B 【狗子】 …聞く。

D 【日不見】 ヤマの岩場に気をつけよ。ヤマの岩場に気をつけよ。

B 【狗子】 同じことを…二回言った？

「村人」たち、ヤマの岩場に立ち入ろうとする。

B 【狗子】 皆さん。山の岩場に行ってはなりません。

山の岩場に行ってはなりません。

あそこに踏み入ればヤマの神の怒りに触れます。

D 【日不見】 きーっ。

「日不見姫神」、地鳴りを起こす。

岩場が崩れ、怪我を負った村人たち。

一同【村人】 ヤマの神がお怒りじゃ。ヤマの神がお怒りじゃ。

D 【日不見】 見たか。これこそわが力。

B 【狗子】 皆さん…大楠木は倒れ、山には新たな神がいらっしやいます。

A G 【村人】 狗の一族の末裔ながら、穢れぬように育てられたという狗子。

E F 【村人】 お前、神の声が聞こえるのか。

B 【狗子】 はい…。

A G 【村人】 ならば狗子、お前を神のミコとミコんで、

神のミココロをわしらに伝える。韻踏めてる…。

B 【狗子】 新たな神は「我を祀れ」とおっしゃっています。

D 【日不見】 何かせよ。私を神と崇める、何らかをせよ。

B 【狗子】 「何らか」をせよ、とおっしゃっています。

A G 【村人】 舞いじゃ。

E F 【村人】 神楽じゃ。

一同【村人】 御神楽舞（おかぐらまい）じゃ。

D 【日不見】 オカグラマイ？

B 【狗子】 神に捧げる、舞のことです。

D 【日不見】 よかろう。その御神楽舞とやら、舞うがいい。

一同【村人】 新たな神の為に舞い踊れ。

「村人」たち、御神楽舞を奏する。

しかし、

D 【日不見】 やめろー。

「村人」たち、地鳴りで吹っ飛ぶ。

D 【日不見】 なんじゃその舞は。

B 【狗子】 あなた…盲のモグラなのに舞が見えるの？

D 【日不見】 見えぬわ。見えぬが感じるわ。

心のこもらぬ形だけの儀式。なんじゃこの舞はー。

E G 【村人】 この御神楽は、ムラに古くより伝わる舞。

B 【狗子】 かつて大楠古多万に捧げられたこともある。

D 【日不見】 きー（地鳴り）。

そんな使い古された神楽で、新たな神であるこの私、満足すると思うたか。

伝わらんぞ。崇め、敬い、奉る心、伝わらんぞ。

狗子。私の御神楽舞。唯一無二の御神楽舞。

舞うのじゃ。

盲のモグラの神楽。韻踏めてる…。

B 【狗子】 このムラの人間では…無理。

いずこより舞方（まいかた）を連れてこなければ。

A E F G 【村人】 しかし、こんな山奥に、来てくださる舞方があるか。

C 【人之子】 私が連れてきましょう。

母さん、私に行かせてくださいーい。

A E F G 【村人】 わんわん。きゃんきゃん。やかましい。

B 【狗子】 人之子…あなたが呼んでこようと言うの。あなたには…無理。

たしかに、あなたには人の言葉を解する力がある。

しかし、あなたの言葉は、人間にはわからないのよ。

「人之子」、引き下がらない。

B 【狗子】 …ならば、この手紙をもっていきなさい。

こんな山奥にお出ましくくださる、舞方様を探してくるのです。

C 【人之子】 母さんから役目をもらったのはこれが初めて。

命を賭けて、舞い方様をお連れしよう。

「人之子」、ムラを飛び出すと「ウラミダケ」と出くわす。

C【人之子】 あ、茸が生えてる。いただきまーす。

E【ウラミ】 ウラミダケ。

C【人之子】 ものけだー。茸の、もののけだー。

E【ウラミ】 いかにも我はもののけじゃ。

かつては大楠古多万と呼ばれ、

ヤマの神たる楠木じゃったが

我を殺めし者たちを、恨む心が茸に宿り、

今はもののけ、ウラミダケ。

赤犬よ。雌赤犬よ。誰か為に走り先を急ぐ。

C【人之子】 そんなの知れたこと、母さんだ。

母さんからの御役目を無事に果たして帰る為。

E【ウラミ】 赤犬よ。雌赤犬よ。あの女は、お前の母ではないぞ。

C【人之子】 …そんなのもちろんわかってる。

育ての親だろうが母さんは母さんだ。

E【ウラミ】 育ての親どころか…あの女はお前の仇じゃぞ。

C【人之子】 えっ…。

E【ウラミ】 お前の本当の母親は、あの女の兄に殺されたのじゃ。

C【人之子】 えええっ…。

E【ウラミ】 死んだ母より、引きずり出された5匹の子犬のうち1匹。

奇跡的に生き残ったのが雌犬お前じゃ。どーん（！）。

お前は、母や兄弟の仇を、母と慕っているのじゃぞ

C【人之子】 な、なんてこと…。

E【ウラミ】 さあ、兄弟たちの恨みの声を聞け。

A D F G 【犬兄弟】 妹よー。お姉ちゃーん

C 【人之子】 ああ、赤犬の兄弟たちー。

E 【ウラミ】 さあ、恨もうぞ。恨もうぞ。ともに人間を恨もうぞ。

人間が祀りし神をも恨もうぞ。一切合切を恨もうぞ。

とりあえず、その手紙をこちらに渡せ。破り捨ててやる。

C 【人之子】 いや…それでも、母さんは、母さんだ。

あの人は、私の母さんだー。

A D F G 【犬兄弟】 妹…。お姉ちゃん…。

E 【ウラミ】 「命の理」に背き、「心の理」に従うつもりか。

C 【人之子】 恨む心で現世に留まるお前こそ、

「命の理」に背く者。どーん（！）。

E 【ウラミ】 うぬぬぬぬ。あの女に味方するならば容赦はせん。覚悟ー。

（すぐやられる）はいー。所詮、茸ー。

おっきいだけが取り柄の茸ー（絶命）。

C 【人之子】 私は、私の心に従い生きるのだ。

犬であろうが、人であろうが、母さんの為に生きるのだ。

E 【ウラミ】 私の体から胞子が飛び散り、ここに着床すつくすく。

何度でも蘇るウラミダケ。

突如、空間が変わる。演者たちが、水のように揺らめく。

G 【真徳丸】 私は、いつから、ここにいるのだろうか。

私は、いつから、私であるのだろうか。「答え」は出ない。

出ない答えを問い続けることが、即ち、私がここにある証。

A B C D E F 「真徳丸」

G 【真徳丸】 私をそう呼んだのは、誰だったのか。

A B C D E F 「真徳丸」

G 【真徳丸】 どうやらそれが私の名前。

G 【真徳丸】 私の目は、開いていない。

私が出来たことは、生きることだけだった。
私は生きた。私の命を燃やした。

A B C D E F 「美しい舞じゃ」

G 【真徳丸】 私には生きることしか出来ない。

A B C D E F 「ありがたい。ありがたい」

G 【真徳丸】 これは…なんだ。

A C 「米じゃ」

D E 「木の実じゃ」

B F 「魚じゃ」

G 【真徳丸】 私ではない命か。

G 【真徳丸】 私は「命」を食べることでのみ

私の「命」をつなぐことができた。

生きれば生きるほどに、舞えば舞うほどに、

私の周りには「命」が捧げられた。

これを私にくださるのは、誰じゃ。

他の命に生かされている、私の命。

「ありがたい。ありがたい」

これが私の生きる業。

私の生業は、生きること。

そこへ現れる「人之子」

C 【人之子】 あなたが真徳丸様ですね。

G 【真徳丸】 どなたですか。

C 【人之子】 私は族谷人之子と申す者。

真徳丸様、私のムラに来てください。

ヤマの神に、舞いを捧げてほしいのです。

ムラに来てくださいーい。

G 【真徳丸】 わんわん。きゃんきゃん。

あなたの言葉は、私にはわからない。

C 【人之子】 あ、そうか…。では、この手紙をお読みください。

子細はここに書いてあります。

読んでくださいーい。

G 【真徳丸】 私の目は開いていない。これは読めない。

C 【人之子】 しまった。かくなる上は、力づくでムラにお連れするまで。

G 【真徳丸】 おやめなさい。私を動かせるのは、私だけです。

C 【人之子】 ああ…どうしよう。どうしたらいいんだー…。

G 【真徳丸】 よし、あなたの命、感じ取りましょう。踊りましょう。

C 【人之子】 はい？

G 【真徳丸】 舞いましょう。

C 【人之子】 舞う？いやいや、私は、舞など舞えません。

G 【真徳丸】 舞を舞えないものはいません。

命あるものは、誰だって、その命を燃やすことができます。

それを舞いと呼ぶのです。

さあ、さあ、さあさあさあ、

あなたの舞いを舞わせてください。

C 【人之子】 真徳丸様ー。ムラに来てくださいーい。ムラに来てくださいーい。

G 【真徳丸】 舞えない。それは、あなたの舞ではない。

あなたの舞いを舞わせてください。

C 【人之子】 私の舞い…。

G 【真徳丸】 あなたの真の舞いを舞わせてください。

C 【人之子】 私は、私は、母さんに…愛されたいのです…。

わたしを大切に育ててくれた母さん…。

母さんの幸いの為なら何だってします…。

お母さん。お母さん。

母さん。私は犬です。あなたの娘ではありません。

ですが母さん、私は、いつも願うのです。

あなたのおっぱいを飲みたいと、

おっぱいを飲みたいと願うのです。

人間の乳が飲みたいではありません。

あなたのおっぱいが飲みたいのです。

あなたの命が飲みたいのです。

それを聞きながら舞っていた「真徳丸」。舞い終える。

G 【真徳丸】 あなたの真の舞い、舞わせていただきました。

わたしの命が、あなたに従えと言っている。

ついて行きましょう。

場面はムラへ。

B 【狗子】 あなたが真徳丸様ですね。私は族谷狗子と申す者。

G 【真徳丸】 なるほど…私はこのヤマの、神の為に舞うのですね。

B 【狗子】 なぜそれを。

G 【真徳丸】 言葉など要らない。

命に直に問うたなら命がそのまま答えてくれる。

なるほど、あ、なるほど、

ここには舞うべき命が、讃えるべき命がある。

B 【狗子】 日不見姫神…ヤマの神はそう呼ばれております。

G 【真徳丸】 日不見姫神…あなたの命、舞わせて頂きましょう。

「日不見姫神」の為に舞う演者たち。

D 【日不見】 きーっ。うれしいー。うれしいー。

B 【狗子】 あなた…盲のモグラなのに、舞が見えるの？

D 【日不見】 見えぬわ。見えぬが感じるわ。

わたしを、崇め、敬い、奉る心。

私の命を、喜んでくれるのか。

かたわとして生まれた私の命。

祈ってくれる者は誰もなかった。

だから私は私で祈った。我が命よ。

我が命として尊くあれ、と。

G 【真徳丸】 あなたは祈る必要など無い。

あなたの命は何もせずとも、光り輝く尊きもの。

祈るならば、私が祈りましょう。

D 【日不見】 きーっ。

B 【狗子】 …よかった。よかった。喜んでおいでです。

D 【日不見】 よし、狗子。こやつをムラに住まわせよ。

毎日毎日、私の為に舞わせるのじゃ。

B 【狗子】 真徳丸様をムラに留めおけ、と言っております。

E F 【村人】 ええっ…。しかし、こんな盲者（めくらもの）、

ムラに置いておくわけには。

D 【日不見】 え、盲？ あなたも盲なの？ 奇遇ねー私もなんですよー。

G 【真徳丸】 私は行かなくてはいけない。

私が舞うべき命、讃えるべき命は、この世のすべての命です。

あなたの舞は舞い終えました。

D 【日不見】 いやじゃー。まだまだ舞って欲しいー。

ずっと舞って欲しいー。

B 【狗子】 日不見姫神…。

D 【日不見】 こやつを大穴に閉じ込めよ。閉じ込めよー。

大穴の中で舞う「真徳丸」。

D 【日不見】 美しい…。美しいぞ…。

G 【真徳丸】 舞が美しいのではない。

私が舞うのはあなたの命。

この舞が美しいのなら、美しいのは、あなた…。

D 【日不見】 さあ、食べてくれ。ヤマの獣たちじゃ。

G 【真徳丸】 要りません。私はすでに、命をいただいております。

神としてのあなたの命です。

D 【日不見】 …どうということじゃ？

そこに「天神様」が姿を現す。

F 【天神様】 ヤマの主たる役目を怠り、何をしている日不見姫神。

大穴に、盲の舞い方を囲うとは…盲と盲、似合いではないか。

D 【日不見】 似合いとか言うなー。そういう関係ではないー（照）。

F 【天神様】 ん？ 貴様…私の姿が見えておるな…。

G 【真徳丸】 さあ。

D 【日不見】 え？ 盲じゃないの？

G 【真徳丸】 私の目は開いていない。現世にあるものは見えない…

しかし、現世にないものは見える。

すなわち私には、神が見える。

D 【日不見】 な、ならば、真徳丸。

お前には、私の姿も見えるということかつ…。

G 【真徳丸】 いや、あなたの姿は…さあ。

D 【日不見】 見えないのおー？ どうしてじゃー？

F 【天神様】 日不見姫神。さてはお前、この男に恋をしているな。

D 【日不見】 ば、馬鹿な…。私はかたわのモグラ。恋などするわけがない。

F 【天神様】 …そのココロは？

D 【日不見】 手無しの私は…「ほれない」。

G 【真徳丸】 ウマイこと言えてる…。

F 【天神様】 しかし、この男真徳丸に、姿が見えぬのが何よりの証。

お前を神たらしめるは、自らの命を祈った心。

真徳丸にその役目、ゆだねし今のお前には、

神としての力は、こっからこーんな感じ（？）。

D 【日不見】 そうなのー。

F 【天神様】 神として居続けたくば、その男を遠ざけよ。

D 【日不見】 それはいやじゃ。

F 【天神様】 ならば手無しのモグラに戻り、本来の命、

獣としての命を全うしたらどうだ。

D 【日不見】 それもいやじゃ。

F 【天神様】 日不見姫神。

何を隠そうこの天神様も、かつては一人の人間であった。

D 【日不見】 急に語り出した。

F 【天神様】 栄華を極めし都人であったが、我を妬みし者ども、

罠に嵌められ都を追われ、西の彼方で命を終えた。はあ。

しかし、人を恨み世を恨み、恨む心がこの我を

怨霊として現世に留め、都に雷を落とした。

我を畏れた人々は、国中に見事な天満宮、

立ててこの我を神とした。

神となったわしは、神となってしまったわしは

人としてはもう成仏できぬのだ。

人を恨むという恥ずべき心。

それを神と祀られた、私の苦しみがわかるか。

何として、その命を終えるか、

それを選べることは、幸せなことじゃ。

D 【日不見】 美しき舞…。美しき我が命…。

「ウラミダケ」が語り出す。

E 【ウラミ】 恨みに恨んでウラミダケ。

諸人讃えし天神様も、元を明かせば崇り神。

諸行無常の世において、唯一変わらぬは、恨む心よ。

恨もうぞ。恨もうぞ。一切合切恨もうぞ。

突如、轟音が鳴り響く。

虚空を見上げる一同。

F 【天神様】 な、なんじゃ。これは…。

E 【ウラミ】 キノコじゃ。大きなキノコがすつくすく。

F 【天神様】 キノコではない、キノコの雲じゃ。

E 【ウラミ】 いや、キノコじゃ。大きなキノコがすつくすく。

恨みに恨むわしの心が、キノコの神様を呼び出したのじゃー。

F 【天神様】 神か、なるほど、この力…。

人が創りしたものではないな。

「天神様」はキノコの雲に語りかける。

F 【天神様】 我は天神様じゃ。天津神・国津神の命（みこと）もちて、

この地に現れ出でた。そなたはこの地を治むる新たな神か。

禍々しい氣を浴び、苦しみ出す「天神様」。

F 【天神様】 この気配、神ではない…。

E 【ウラミ】 いや、神じゃ。神の氣じゃ。

新たな世を創る、神の氣じゃ。

F 【天神様】 くさびらめ、黙りおれ。

もののけ風情が、神に神を説くでない

E 【ウラミ】 この大地には「命」の気配がまるでない。

神、人、獣、あらゆる命がキノコの力で消し飛びおった。

F 【天神様】 真徳丸…。見えているのか？ そなた、見えておるのか？

「真徳丸」は虚空を眺めている、そこに…。

F 【天神様】 これは、雨か…。

E 【ウラミ】 いや、違う。

F 【天神様】 黒い雨じゃ。

E 【ウラミ】 これは恵みの雨ではないぞ。

G 【真徳丸】 しかし、呪いの雨ではない。

人・神・獣の差別なく、ただただ傷つけ、命奪う雨。

F 【天神様】 真徳丸よ。人に見えるものが見えず、

人に見えぬものが見えるという貴様に、

この天神様が問うてやる。

あれは神か。神ならざるものか。

G 【真徳丸】 あれが神か、神でないのか、それを決めるのは私ではない。

ただ、やつの前では神も獣も人間も、等しく、無力だ。

そして私は、私の命は、やつの為には舞えない。

その空間は静かに、暗くなっていく。

やがて「狗吉」の姿が浮かび上がる。

A 【狗吉】 恥ずかしながら帰って参りました。

が、恥を知るのはお前らじゃ。

なんじゃったんじゃ。この戦は。

負けて降参した途端、天皇陛下は国民となった。

神が人となるとはどういうことじゃ。

DEFG 「すべて国民は、法の下に平等であつて、人種、信条、性別、社会的身分又は門地により、政治的、経済的又は社会的関係において、差別されない。」

A 【狗吉】これが憲法。俺も国民になれたわけか。負け戦さまさまじゃ。ありがたいわ。

(周囲を見回し) …肉を食らうておるわ。どいつもこいつも罰当たりめが。

そうか…神が人になるような時代じゃ。

神や仏などおそろしくないのじゃな。

神が人になった今…俺たちは何を畏れ、敬えばいいのじゃ。

演者「E」がつぶやく。

E キノコじゃ。

A 【狗吉】キノコ…？

「狗子」が現れる。

B 【狗子】生きて、帰って来たのですね。

A 【狗吉】ああ、狗子。俺は人間様として死のうと思つたが、俺の命がそうはさせてくれんかった。

海の向こうのヤマの中、幾千の敵に囲まれて

もはやこれまで、万事休すと、覚悟を決めし仲間たち。

靖国で会おうと誓い合い、握りしめたる手りゅう弾。

天皇陛下万々歳、金具に指を絡ませる…。

俺は、死ねんかった。手りゅう弾を彼方へ放り投げ、泥水の中を這いずりまわり、狗のように逃げてきた。

俺は、人であろうが狗であろうが、

生きたいと願ってしまったのじゃ。

B 【狗吉】 兄さんはまだこの国で

やるべきことがあるのでしよう。

A 【狗吉】 狗子…。なんじゃこの体は…。

「狗子」の言葉に、「ウラミダケ」の声が重なる。

BE 【狗子】 キノコの力を浴びてしまいました。

A 【狗吉】 キノコじゃと…。

BE 【狗子】 あの日、街に降りたのです。

空が光りました。大きなキノコが現れたのです。

私は黒い雨を浴びながら、ムラに帰ってきたのです。

A 【狗吉】 柔らかかったお前の肌はどうした。これが、これが…

これは呪いじゃ。誰じゃ狗子を呪うたんは。

こいつが一体、何をしたというんじゃ。

こいつはこれまで一度たりとも、肉を食らうておらんぞ。

経を書きうつし仏を彫り、殺生もしておらんぞ。

B 【狗子】 兄さん。穢れぬままに生きておっても、

穢れる時はこのように、穢れるのですよ。

A 【狗吉】 穢れじゃと？ 狗子、これはお前の穢れではない。

お前は清く美しく、現世の全てを鏡のように写しだす。

人間の穢れが、この世に生きるすべての人間の穢れが、

お前の体に現れたのじゃ。

DEFG 【村人】 狗吉。生きて帰って来たか。

A 【狗吉】 なんじゃ、文句でもあるんか。

DEFG【村人】 狗吉。我らとともにヤマに入ろう。

神の声が聞こえる巫女の狗子を使い、
日不見姫神の様子を探るのじゃ。

A【狗吉】 …神を…追い出すというんか。

DEFG【村人】 時代は変わったのじゃ。

いまは洋の東西いずれからも、神様をお呼びできる。
何を信じるも自由なのじゃ。

ヤマの神は所詮ヤマのことしか守れぬ。

国が負けては意味が無い。

弱き神などいらん。

もっと強い神様に我が身を守っていただきたい…

A【狗吉】 阿呆か、お前ら…。

生まれ育ったヤマの神すら守れぬ者を、
どこの神様が誰が守ってくれるんじゃ。

やがて一同は、「大穴」にたどり着く。

B【狗子】 ここです。この大穴に、いつも真徳丸様といるのです。

A【狗吉】 …狗子。どうじゃ。

B【狗子】 日不見姫神。日不見姫神…。
聞こえませんか。何も聞こえませんか。

DGFG【村人】 日不見姫神とてヤマの恵を受けるものじゃ。

黒い雨でヤマが傷ついた今、神の力も弱まったのじゃ。
死んだんじゃ。ヤマの神は死んだんじゃ。

突き落とせーっ。

「村人」たち、「狗吉」と「狗子」に襲いかかり、
二人を「大穴」に突き落とす。

DEFG【村人】神なき今、

キノコの穢れを受けている狗子など居ぬ子。
要らぬ子よ。

動かなくなってしまった二人。
そこに「人之子」がやってくる。

C【人之子】母さん。おじさん。大丈夫ですかあ。

駄目だ…深い。深すぎる…。

どうして私は犬なんだ。人間の体さえあれば、
すぐに母さんを引き上げられるのに…。

私は、すぐにヤマを駆けずり回った。

兎やトカゲや川魚を捕まえて、大穴に落とす。

母さん、食べてください。

生き物を放り込んで行く「人之子」。

A【狗吉】狗子…あの犬が…取ってきてくれたぞ…食うんじや。

B【狗子】私は穢れてはいけない。

そう教えてくれたのは兄さんでしょう。

獣の肉を食べるわけにはまいりません。

C【人之子】母さん、食べてくださいーい。

A【狗吉】これは…手の無いモグラ…？

B【狗子】まさか、日不見姫神…。

あなた…モグラに戻ったのね。手も指も爪もないけれど。
ようやく自分の本来の命として、
生きる決心、死ぬ決心がついたのね。

真徳丸様に、感謝しなくて…。

C 【人之子】 ああ、もう獣がない。

ヤマに食べられそうなものはない。

母さん…母さん…。

私を食べてください。わたしを母さんの命にしてください。

「人之子」、自らの身体を「大穴」に投じる。

B 【狗子】 人之子…どうしてそんな愚かなことを。

C 【人之子】 「命の理」に背き、「心の理」に従ったまです。

B 【狗子】 私は、獣の肉を食べるわけにはまいりません。

A 【狗吉】 どうしたらええんじや…。

B 【狗子】 なにもなくていいのです。

同じところから生まれてきた私達。最後は同じ穴の中。
ヤマに命をお返ししましょう。

A 【狗吉】 ヤマに返してどうするんじや。もうヤマに神はおらんぞ。

この国にはもう、ヤマにもカワにも、どこにも神はおらん。

この国は、この国の人間は、

神や仏よりもあのキノコを畏れておるのじや。

B 【狗子】 これも御仏のお導き。

私には極楽浄土が待っております。でしよう？

A 【狗吉】 お前をこんな場所に導くような仏が用意した、
極楽浄土なぞ信用できるか。

B 【狗子】 では、どうするのです。今わの際に私達、
一体何に祈るのです。

A 【狗吉】 狗子…神になろう。

B 【狗子】 神に…？

A 【狗吉】 俺達自身が神となるのじや。

B 【狗子】 私たち自身が、神に…？

A 【狗吉】 かつてイザナギとイザナミが、体を重ねこの国を、

生みたもうたように俺たちも、俺たちもまた神となり、
新しい国を生むんじや。

俺たちの国は俺たちが生み出すんじや。

狗子。神になろう。新たな国を生んでくれ。

B 【狗子】 兄は私の手をとった。

俺の手は穢れとる。触っちゃいかんと罵った、
その手で私の手をとった。

キノコの力で焼けただれ、黒ずみ歪んだ私の肌を
兄の穢れた手が撫でる。

獣を殺して私を育て、神を殺して戦へ向かい、
人を殺して生き延びた兄の手。

そうか、兄は私を抱く為に、キノコに穢れた私を抱く為に
生きて帰って来たのだと、ああこれは邪念。

ノミがあれば仏を彫り、筆があれば経を写し、
この邪念を断ち切ることができただろうに。

いや…私はずっと、兄を救いたかったのだ。
穢れた私はようやく今、兄を抱えることができる。

A 【狗吉】 狗子。お前の体はどうなっている。

B 【狗吉】 私の体は大きくなっておりますが、ひとつだけ、
大きくなっていないところがあります。

A 【狗吉】 俺の体も、大きくなっておるが、ひとつだけ、
大きくなり過ぎたところがある。

俺の大きくなり過ぎたところと、
お前の大きくなっていないところ、そのふたつをつなぎ、

この国を生もうではないか。

B 【狗子】 子を残したいという「命の理」ではない。

A 【狗吉】 お前を愛しいと思う「心の理」でもない。
なんの理でもないのじや。願いじや。

俺たちの命が求める、願いじや。

狗子、神になろう。新たな国を産もう。

B 【狗子】 兄に抱かれる私は神じや。業に穢れたこの兄と

キノコに穢れたこの私。私たちは、新たに、この国を産む。

「狗吉」と「狗子」の激しい舞。

その傍らで「真徳丸」は語り出す。

G 【真徳丸】 私は私の命を燃やしている。

私は何の為に舞っているのか。

これは何を讃える舞なのか。

今の命を激しく生きる二人の命を讃えているのか。

やがてこの世にやってくる新たな命を讃えるのか

あるいはその両方か。私は、ただ、「命」を踊り続ける。

「真徳丸」は演者「G」に戻り、なお語り続ける。

G さて、何を語って終わりとするのか。

そんなことは問題ではない。問題は、

何から語り始めるかだ。

私がいままで私であるのか。

そんなことは問題ではない。問題は、

私は、いつから、私であったのか。

ことの終わりは、すなわち始まり。

すべてのことは、始まる為のみ終えられる。

私は、私である前は、何をしていたのか。

しかしそんなことは問題ではない。問題は

問題は…

私は、私でなくなった後に、何をしているのか、だ。

鳴り止む音楽。客席を静観する演者たち。
場内アナウンスの音が聞こえる。

アナウンス これをもちまして、シユウエンでございます。

客席を静観し続ける演者たち。

アナウンス どなた様もお忘れ物のなきよう、お気をつけて
オカエりくださいませ。

演者たち、ゆっくりと舞台を下り始める。

アナウンス 本日はご来場、まことにありがとうございました。

すべての演者が、姿を消す。

了

※ 上演を希望する際は、有料・無料に関わらず、
必ず劇団までご連絡いただき、戯曲使用の許諾をお受けください。